HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	下中弥三郎の生命主義教育論：デモクラシーとファシズムの〈間〉 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	伊東, 順真
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第16038号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92733
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	ITO_Junshin_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　　氏名：伊東 順真

	主査 教授	白水 浩信
審査委員	副査 教授	北村 嘉恵
	副査 教授	近藤 健一郎
	副査 教授	辻 智子

学位論文題名
下中弥三郎の生命主義教育論
— デモクラシーとファシズムの〈間〉—

本論文は、1920 年代から 40 年代前半期にかけて、教育運動をはじめ、労働運動や農民運動に携わった下中弥三郎（1878-1961）の思想を検討したものである。下中は、大正デモクラシー期には学習権の主張にみられたような新教育運動を牽引する役割を果たした一方で、昭和ファシズム期には大政翼賛会の幹部として総力戦国家体制強化を喧伝し、その評価が難しい人物である。こうした下中の思想変容の機序を解明するにあたって、申請者は「生命」という概念に着目し、言説内在的に分析することを課題として設定する。

その際、申請者は下中の著作 206 点を調査し、そのうち 64 点に現れる「生命」の用例（514 件）を抽出している。まず申請者は時系列に整理した用例データに基づき、戦前、下中がいかに「生命」を多用していたかを指摘すると同時に、仔細にみれば、デモクラシー期とファシズム期の〈間〉にあたる 1925 年から 1932 年にかけて使用頻度が極端に落ちていることに注目する。下中の生命言説の変容の閾がこの時期にあると目され、このことを立証すべく、本論文ではデモクラシー期とファシズム期とその〈間〉に分けて、下中の「生命」用例について検討され、概念変容の契機とその思想史的意義について考察される。

こうした下中の教育思想へのアプローチの仕方自体、新規性を有する。従来の先行研究では、下中の功績を新教育運動の旗手として顕彰する一方で、後年の全体主義教育の推進役という点に関しては位置づけ切れておらず、研究課題として残されてきた。このことは単に下中に留まらず、大正新教育運動についても言え、近年の先行研究のなかには新教育を「生命

の躍動」の思想として総括するものもあるが、下中はもとより各教育実践家の戦中期の言説は取り上げられず、大正期の「良質」の部分のみの抽出に終始している観がある。こうしたなか申請者は、鈴木貞美が文学思想史研究において提起した生命主義という視座に倣い、その有効性を下中とその周辺人物において検証することで、新教育から全体主義教育へと到る理路を「生命」において通底する教育言説の自己展開として描出することを試みる。

本論文は全六章からなり、時系列に沿って論理的整合性のとれた無理のない構成となっている。冒頭、課題と先行研究を確認し、第二章では戦前の生命主義思想の広がりを鈴木貞美の所論を参照しつつも、オイケンやベルクソンの「生の哲学」の受容と氾濫について自前の素材を交えて論じている。第三章では 1920 年代前半の下中の生命主義教育論が祖述され、それが学校教育の体系性、形式主義への批判として展開され、「生命」は西洋文明に対する反措定として掲げられた点が明らかにされる。この時期の下中にとって、生命の成長のみが教育であり、文化は畢竟生命の肥料でしかなく、申請者はこうした教育観では具体的な教育内容は希薄になりがちで、児童の村小学校の教育実践と符牒が合うと指摘する。第四章では 1920 年代後半の下中が権藤成卿及び大川周明の影響の下、生命国家論を主唱するに到る理路について検討される。かつての下中は子どもの生命のみを重視する立場から、ほぼ宗教色のない生命主義論者であり、ベルクソンやオイケンの影響下に、宇宙や神、如来といった超越存在と生命を同一視し信仰する教育の世紀社同人の生命主義とは一線を画していた。ところが権藤の社稷思想、土と穀を充足し性命を保つ農本主義国家観にふれ、大川の天皇制国家を永遠の生命体と見做す生命国家論にふれたことを契機に、下中の生命主義は変質し、個人主義から全体主義へと転じていく。第五章で扱われるように、1932 年以降の下中は顕著な生命国家論者と化し、天皇制家族国家観や八紘一宇によるアジア主義を喧伝し、教育界に向けては国民皆戦士たることが教育の使命であり、天皇に殉じることが永遠の生命に与ることだと説いて回るようになる。その時ですら、新教育運動の言説資源たる子どもの生命尊重、これを軽んじる学校批判はなおも繰り返され、申請者は下中の「生命」概念が西洋近代文明への反措定として機能し続けていた点を指摘する。

このように申請者は、下中弥三郎の教育言説における「生命」概念を分析し、それが西洋資本主義文明に対する反措定であったと指摘する。下中はデモクラシー期より「生命」について敷衍することは稀で、既存の学校教育を批判する点ではラディカルである一方、その内実は抽象的なものに留まった。しかし他の論者に見られたように、下中は宗教性を帯びた普遍的実在として「生命」を語ることは避けていたのだが、1930 年代、「生命」という審級に天皇制国家を据えた大川の生命国家論を支持するに到り、全体主義のイデオローグへと転身するのだと結論づけられる。

このように、本論文は下中弥三郎に着目し、1920 年代から 30 年代にかけてその思想を駆動し反転させた生命言説の歴史的機序の一端を解明するものとして評価しうるものであり、既往の新教育運動史研究にも一石を投じるものと思量する。よって学位申請者、伊東順真は博士(教育学)の学位を授与される資格を有するものと判定する。